

## 少子化時代の子育て

### 目次

少子化社会の子どもたち	深谷昌志	2
〔調査レポート〕少子化時代の子育て		5
要約		6
はじめに		10
1. 調査方法とサンプル		11
●調査方法		11
●母親の基本的属性		12
2. 現代の子育て		15
●どう子育てをしてきたか		15
●子どもはうまく育っているか、そして将来は		20
●母親のタイプ		24
3. 少子化を生み出すもの		28
●人生で得たもの・失ったもの		28
●子どもに対する感情		31
●少子化の背景		33
4. 少子化と子育て		37
●子どもの人数と幼児期の子育て		37
●現在の子育て		39
●子どもへのかかわり		40
●子どものタイプ		42
●子どもの自立		43
5. 少子化と母親の人生		45
●子どもの存在		45
●子ども数と人生で得たもの・失ったもの		48
●母親のタイプと子どもの人数		51
●これからの人生		54
●まとめ		58
〔対談〕子どもの性格はどう形成されるのか…詫摩武俊 vs 深谷昌志		59
・文献紹介『伸びてゆく子供たち』		67
資料 調査票見本および集計結果		73

\*おことわり：文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# 少子化社会の 子どもたち

静岡大学教授  
深谷昌志

## 一人っ子はわがままか

1.57から1.54、そして1.50、さらに1.46と少子化の流れに歯止めがかかりにくいらしい。そうした少子化傾向の背景については、高学歴化をふまえた職を持つ女性の増加や、子育ての将来に明るい見通しを持ちにくいなど、多くの理由が考えられる。

しかし、ここではそうした論議を避け、現実問題に目を向けてみたい。その際、少子化の問題を2つの側面から検討することが可能であろう。子ども自身が少子化をどう受けとめているのかと、親がどう考えているかである。

まず、子どもたちは少子化をどう考えているのか。平成5年に小学5年生2千人の子どもたちに「きょうだいの多い子」「少ない子」をイメージさせて、その子どもたちがど

ういう子どもだと思ふかを尋ねてみた。

	一人っ子	きょうだいの多い子
①親に甘えている	61.5%	18.3%
②友だちが多い	62.5%	83.1%
③しっかりしている	56.9%	73.3%
④勉強が得意	54.9%	56.5%
⑤やる気がある	51.6%	67.9%

(「とても」+「まあ」そう思う割合)

子どもたちは、一人っ子は甘えん坊だが、きょうだいの多い子は友だちが多く、しっかりしていると評価している。全体として、子どもたちの間できょうだいの多い子の方が評判がよいような印象を受ける。

たしかに一人っ子はなんとなくわがままだが、きょうだいの多い子は人づき合いがよい感じがする。そこで、実際にそうなのか。子どもたちに自己評価を求め、それをきょうだいの数とクロスさせてみた。

	一人っ子	3人きょう だい以上
①元気がある	66.9%	69.7%
②友だちが多い	54.8%	58.7%
③自分勝手	42.7%	32.5%
④だらしがない	28.5%	19.6%
⑤礼儀正しい	21.3%	14.4%

(「とても」+「まあ」その通りの割合)

この結果によれば、3人以上のきょうだいのいる子どもは、自分を「元気で友だちが多い」と自己評価しているのに対し、一人っ子は「自分勝手かもしれないが礼儀正しい」と考えている。

したがって、「一人っ子がわがまま」という評価は、一人っ子自身もそう思っており、ある程度まであてはまるように思える。一人っ子は家に子どもは自分だけなので、がまんをする必要がなく、自己中心的になりやすい。そのかわり、「おっとりしている」や「しつけが行き届いている」などの長所も認められる。

そうして、少子化社会になると、子ども全体が一人っ子に感じが似てくるのかもしれない。

### 親としての気持ち

それでは、母親たちは子どもが多い、あるいは少ないをどう感じているのか。先ほどの調査をした子どもの母親たちに聞いた、今の子どもの数で満足しているのかと、その理由を子どもの数とクロスさせて分析してみた。

子どもが1人=68.2%

(「病弱だから」「生まれなかった」

「仕事が忙しくて」)

子どもが2人=73.1%

(「2人で満足」「経済的に無理」

「体力的に限界」)

子どもが3人以上=79.8%

(「今の人数で満足」「経済的に無理」)

数値は「(子どもの数に)満足している」割合

( )内は、子どもが今の人数の理由

こうした数値を見ていると、子どもの数が増すごとに、母親としての幸せ感が増す傾向が認められる。それと同時に、一人っ子の親にはそれなりの理由があり、そして、その1人の子を大事に育てている。また、2人あるいは3人以上の親もそれなりの背景があって、子育てをしている姿が浮かんでくる。

そこでもう少し踏み込んで、母親たちが子どもの多さや少なさの利点と欠点をどう考えているのかを設問してみた。

	一人っ子の親	3人以上の子の親
長所	①目が届く (67.5%)	①家庭が幸福 (71.3%)
	②希望を満たせる (68.0%)	②たくましい (47.4%)
短所	①淋しそう (65.2%)	①希望を満たせない (48.8%)
	②友だちづき合いが苦手 (54.4%)	②しつけにくい (40.7%)

(「そう思う」割合)

一人っ子だと好きなだけなんでもさせることができる。でも子どもが1人できょうだいがいないのが淋しそうだし、大きくなってからもきょうだいがなくてかわいそうだというのが、一人っ子を持つ母親の気持ちのように思える。それに対し、たくさんの子どもの母親は家庭がにぎやかで楽しいし、子どももたくましい。それだけに心配はないのだが、経済的に考えても子どもの進学希望を満たすのがむずかしい。特に大学まで進学させられないのが心苦しいと答えている。一人っ子の親も、3人以上の子の親もそれぞれに楽しみと悩みを持っているのがわかる。

このように、子どもの少なさにはそれなりの背景が認められるので、子どもを多くとはいにくいのが、少子化対策としては、子どもを安心して育てられる環境作りがなによりも必要のように思われる。



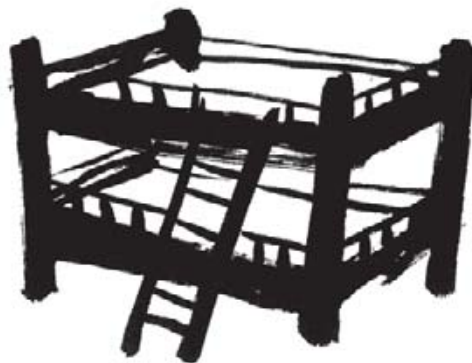
〔調査レポート〕

# 少子化時代の子育て

文教大学女子短期大学部助教授 石川 洋子

日本心理センター研究委員 山根はるみ

東京学芸大学教授 深谷和子



調査レポート

少子化時代の子育て

要約

● 調査概要

1. 調査主題 少子化時代の子育て
2. 調査視点 現代の出産と子育てをめぐる状況や母親にとっての子どもの存在、少子化が子どもの育て方にどう影響し、そのために母親のライフスタイルがどう変化しているかなど、少子化時代の子育ての問題を明らかにしようとした。
3. 調査項目 子どもが4、5歳の頃の育て方、現在の子育てへの配慮、子どもに対する心配、子ども・母親のタイプ、子育てへの夫の協力、子どもによって得たもの・失ったもの、幸福感、一人っ子の母親と多子の母親の子育ての比較など。
4. 調査時期 1994年6月～7月
5. 調査対象 東京・神奈川・千葉・岐阜の5つの小学校に子どもを通わせている母親
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査
7. サンプル数 1,896名

1. 少子化が進行する中で、少子（一人っ子）の母親と、多子（3人以上）の母親では、子育ての方法や親子関係がどう違い、子どもの意味や母親のライフスタイルがどう変わるか、等について明らかにすることを目的とした。

調査対象は、東京、神奈川、千葉、岐阜の5つの小学校に子どもを通わせている母親1,896名で、調査時期は1994年の6月から7月にかけてであった。

2. サンプルの子ども数は、一人っ子が11%、2人が55%、3人が30%、4人以上が4%であった（図1）。しかし、今後の出産予定を聞くと、一人っ子の母親ですら、「ぜひもう1人産みたい」ものは11%でしかなく、全体の9割がこれ以上の出産予定を持っていなかった。

（図2・表4）

3. 一人っ子の母親が、意図的に子どもを1人にした場合は少なく、5割は「恵まれなかった」と答えている。「経済的(住居問題も含む)に」が12%、「子どもが好きでないから」が7%、「仕事を続けるために」は1%にすぎなかった。(図3)



4. 子どもの祖父母と同居した経験のない母親は66%、主な育児担当者を「母親である自分」とするものは9割近かった。(表6)

5. 子どもの現在に対する評価は概して高く、どの側面にも安心感を持っている。強いて、少し欠けるとされている項目を拾うと、「しつけ、成績、たくましさ、自立心、やる気」があるが、それを指摘する母親はせいぜい2~3割にすぎない。(図8)



6. 子どもへの教育期待は非常に高く、男子は大学かそれ以上が86%、女子も短大を含めると79%の親が高学歴を期待している。(表7)



7. 子どもを持ったことで、得たものは大きいですが、失ったものもある。とくに3人以上の多子の母親には、一人っ子の母親よりも、その両方が実感されている。(図12・表22)

8. 第1子出産年齢が早いほど、子どもの数が多くなり、学歴が高いほど、第1子出産年齢が高くなる。また一人っ子の母親の第1子出産年齢は、29歳以上が多い。フルタイムで働く母親は、専業主婦や他の職業形態の人々より、一人っ子が多い傾向がある。(表12～表14)

9. 「子育てに手がかからなくなったら、何かを始めたい」とする人々は「とても・わりと・少しそう」を合わせると、9割近くにも達する。(図16)



10. 一人っ子の母親は家事もするが、おしゃれで、外出もよくしており、タイプとして家内型・家外型の側面を合わせ持っている人が多い。多子の母親は、どちらかといえば親戚づき合いを大切にし、夫の世話をし、家計のやりくりもする、いわば昔風に近い「家内型」である。(表25)

11. 一人っ子の母親は肩こりなどの不定愁訴を持ち、多子の母親は「体力の低下、いらいらして怒りっぽい」傾向にある。(表26)




12. 子ども数が増えるほど、母親の幸福感は増加する。フルタイム、パートタイムで働く母親は、多子を持つと大きく幸福感が増加する。自営業の母親は、子どもの数にかかわらず、幸福感はどのグループより高い。(表28・図22)



13. 少子化の進行によって女性は、かつての時代のような「子育てだけの人生」という重荷から解放されたかにみえるが、子どもを1人または2人しか育てない代わりに、人生の充実感を何に感じることができるか、自己実現をどうやって達成するか、それらを見いだせないまま、中途半端な状態にいるように思われる。日本での、女性の社会進出は諸外国に比べ多分に遅れており、女性が社会的達成を果たすための条件整備は、あらゆる面で遅れている。子どもを少なくした分、それに倍する人生の充実をどう得ていくか、そのための社会のあり方をどう変えていくかが、少子化社会に生きるわれわれの新しい課題であろう。

---

---



## はじめに

国を挙げて人口抑制を図っている中国のような例があるというのに、わが国は少子化傾向に歯止めがかからず、悩んでいる。現在の人口を維持するには、合計特殊出生率（1人の女性が一生の間に産む子どもの数）で2.08が必要といわれているが、年々低下傾向をたどり、1993年には1.46までに落ち込んだ。今後は多少上向きになると予想する向きもあるが、定かではない。

女性問題に引きつけて考えれば、子どもの数が少なくなったことで、親子関係や家族のあり方、そして育児のスタイルは、すでに大きな影響を受けていると思われる。そればかりか母親のライフスタイルも、少子化によっ

て今後さらに変わっていくとも予想される。

他方で厚生省では「エンゼルプラン」と称する、安心して子どもを産み、育てられる環境づくりを目標に、子育てを社会的に支援しようとして計画しており、21世紀の少子化・高齢化社会に向けた施策の柱と位置づけて、近いうちの実施をめざしている。こうした社会的背景の中でこのレポートは、小学生の母親をサンプルとして、現代の出産と子育てをめぐる状況や母親にとっての子どもの意味、少子化が子どもの育て方にどう影響するか、母親のライフスタイルがそのためにどう変わってきているか、等の問題を明らかにすることを目的として企図された。



## 調査方法とサンプル



### ●調査方法)))

調査対象は東京、神奈川、千葉、岐阜の5つの小学校に子どもを通わせている母親1,896名で、調査時期は1994年の6月から7月にかけてであった。調査方法は、担任を通して子どもに封筒に入れた調査票を持ち帰ってもらい、後日回収した。

なお、本調査で使われる「子ども」は、全て調査票を持ち帰った子どもをさしている。子どもの学年は、各学年ほぼ均等に分布しており、第1子が約5割、第2子4割、第3子1割となっている。

## ●母親の基本的属性)))

まず今回の調査のサンプルである、母親の基本的属性をみていこう。表1のように、母親の年齢は30代前半から40代前半までが全体の9割を占めていて、一番多いのは30代後半の41%である。

表2に示したのが母親の職業であるが、専

業主婦と、何らかの形で仕事を持っている主婦とがほぼ同じくらいの割合である。

次に表3で母親の学歴をみると、高卒が約半数を占め、短大・専門学校卒はほぼ3割、大卒は15%であった。

表1 母親の年齢

(%)

25歳以下	26～30歳	31～35歳	36～40歳	41～45歳	46歳以上
0.7	4.9	29.5	41.4	20.5	3.0

○は最大値(以下同)

表2 母親の職業

(%)

専業主婦	パートタイム	フルタイム	自営業	その他
47.2	28.4	10.7	9.7	4.0

└──────────┘  
48.8

表3 母親の学歴

(%)

高卒	短大・専門学校卒	大卒	その他
49.3	29.6	15.0	6.1

次に、図1で子どもの数をみている。2人が55%と半数を超え、一人っ子が11%、3人が30%、4人以上は4%となっている。また母親に、「もう1人子どもを産む予定があるか」を尋ねたのが図2である。母親の9割は

「もう予定がない」と答えており、表4に示すように、一人っ子の母親ですら、「ぜひ産みたい」は11%でしかなく、社会が期待するほどの数を望んでおらず、少子化に歯止めをかけることは当面むずかしそうである。

図1 子どもの数

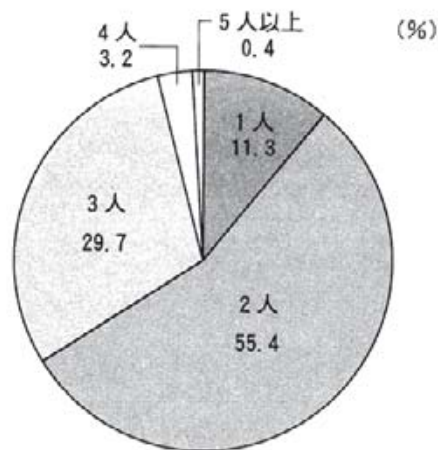


図2 もう1人産む予定があるか

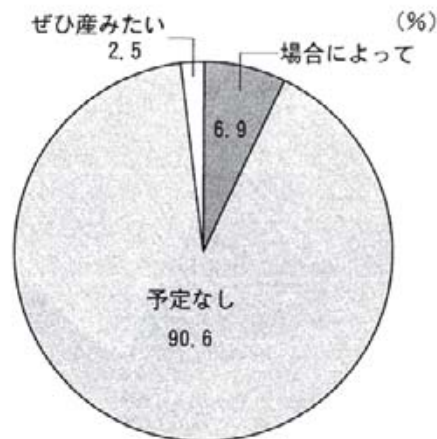


図3には、一人っ子の母親に聞いた「一人っ子」にした理由を示した。外国では、DINKSの夫婦、Child Freeを通す夫婦が多くなっていると聞くが、今回の調査では「恵まれなかったから、一人っ子になった」が5割で、意図的に子どもを一人っ子にしたものは、ごくわずかという結果であった。す

なわち、「好きでないから」とするものは、わずかに7%、「経済的、または住居の狭さから無理だった」が12%、「仕事を続けるために」意図的に選択した結果というのはわずか1%であった。日本の母親は、欧米の人々より現在も子ども好きなのであろう。

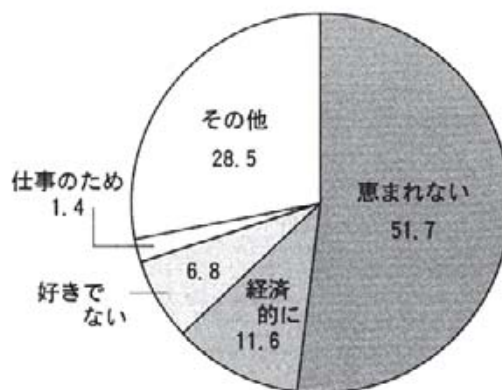
表4 子どもの数 × もっと子どもがほしいか

(%)

	ぜひ産みたい	場合によって	予定なし
1人	10.5	16.6	72.9
2人	2.0	6.6	91.4
3人以上	0.5	4.6	94.9

図3 1人にした理由

(%)





### ● どう子育てをしてきたか)))

ここからは、母親がこれまでどのように子育てをしてきたのかをみていこう。表5にあるように、8割以上の母親が結婚、あるいは出産を機に退職しており、職をずっと継続しているものは15%にすぎない。

そして表6にあるように、主に育児をしてきたのは、「母親である自分」だったとするものが9割近くを占める。日本では今なお、母親による子育てが一般的な育児スタイルであって、保育所利用者はわずか4%にすぎない。育児や家事を肩代わりしてくれる可能性のある祖母との同居も、「同居したことがない」母親が66%と多数で、たとえ祖母と同居しても、乳幼児期に少し家事育児を分担してもらったくらいで、現在はほとんど分担してもらっていない状況のようである。

図4は、子どもが4、5歳の頃、母親が子

どもにどのくらい手をかけて育てたかをみたものである。表の下の4項目を除いて、子育ての際に母親がよくする項目をみると、「とても・わりとそうだった」の数値が大きいものの順に、「よくスーパーなどと一緒にいった」から「よく写真を撮った」「よく一緒に遊んだ」「よく本を読んであげた」「寝るときなど、よくお話をしてあげた」など、母親の細かい対応ぶりがうかがえる。逆に、「あまり『おかえり』と言ってやれなかった」「忙しくて、家にいないことが多かった」などは、7割前後が「全然そうでなかった」と否定しており、全体として、わりとよく子どもの世話をしている様子がみてとれる。

では、子どもに何かあったときの心配ぶりはどうか。

表5 結婚・出産と仕事とのかかわり

(%)

結婚で退職	第1子出産で退職	第2、3子出産で退職	ずっと継続
58.9	23.9	2.3	14.9

表6 1歳までの育児

(%)

主として母親	祖母と共同	保育所など	その他
86.0	9.4	3.7	0.9



図4 子育ての配慮（4、5歳の頃）

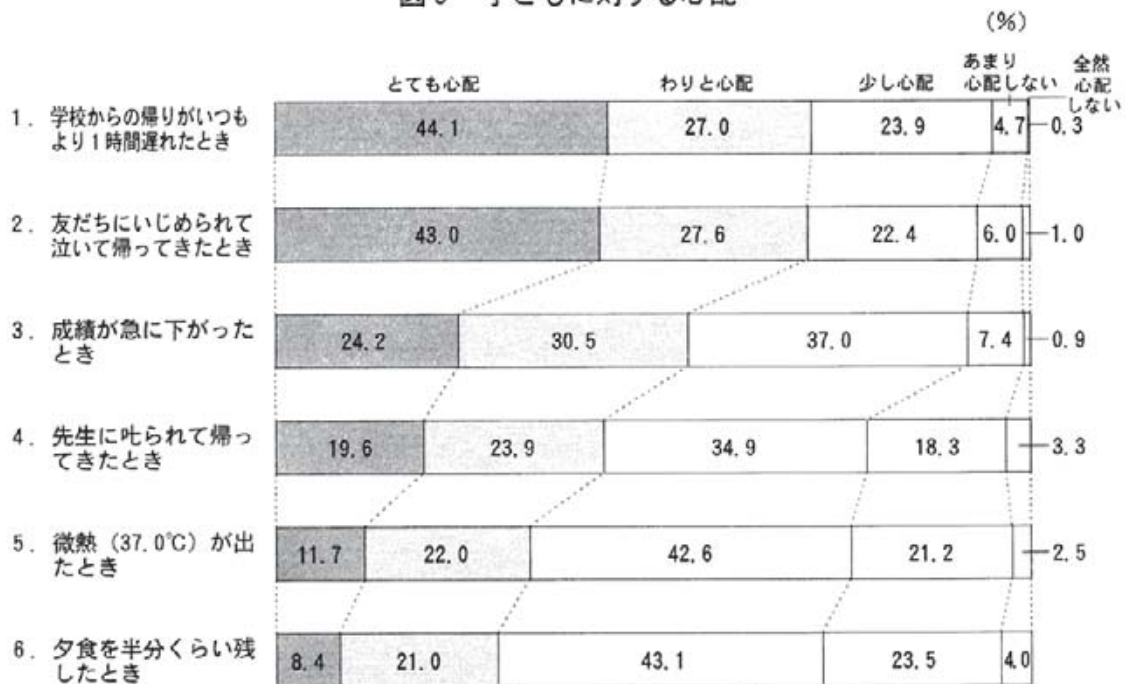


図5については、かつて子沢山の時代の母親なら用意した項目のどれにも、たぶん「あまり心配しない」と答えたであろうが、「あまり心配しない」と答えたタフな母親は、「学校からの帰りがいつもより1時間遅れたとき」、次の「友だちにいじめられて泣いて

帰ってきたとき」「成績が急に下がったとき」で1割を切っており、総じて今の母親たちは子どもの様子をそばで見ながらも心配の種は尽きないようである。

したがって、子どもへの関心は高いわけで、図6に示したように、「好きなテレビ番組」

図5 子どもに対する心配

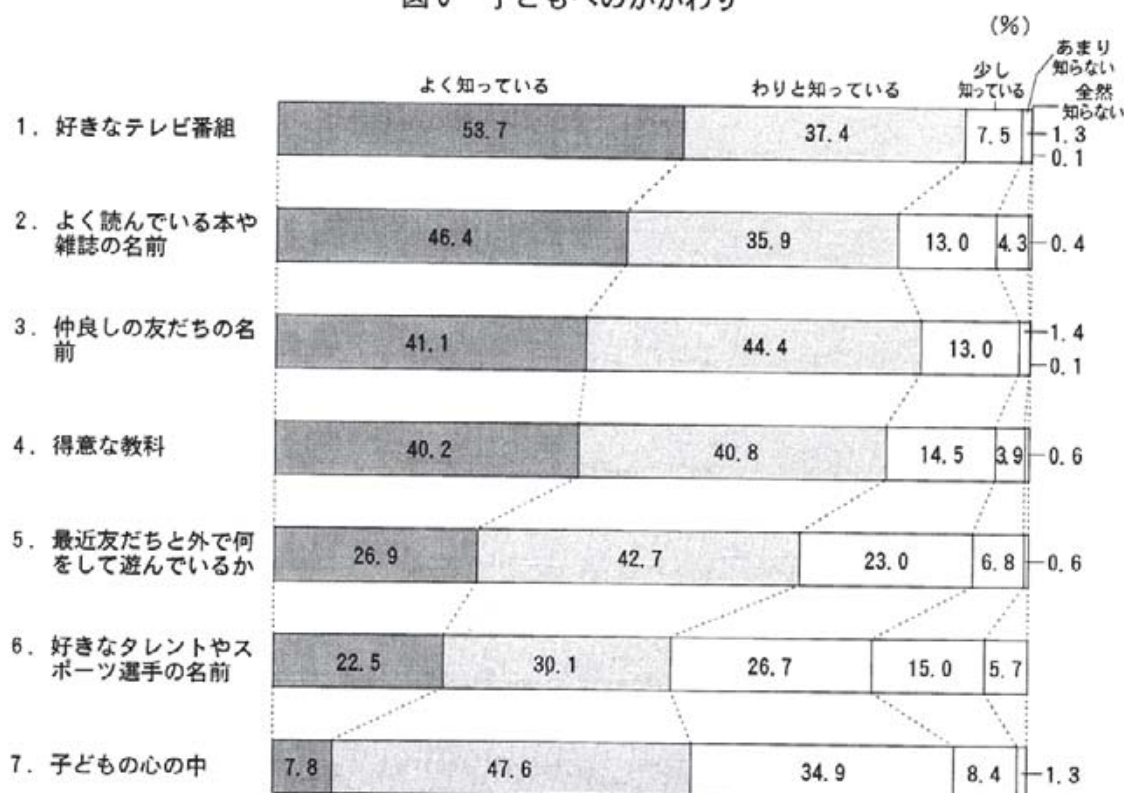


から、「子どもの心の中」に至るまで「よく・わりと知っている」割合は、すべての項目で5割をかなり上回っている。

子育てぶりについて、とかく評判の悪い現代の母親だが、以上のデータを見ると、それなりにがんばって子育てをしていることが明

らかにされたわけである。ここからは、その結果として、子どもが現在どう育っているのかをみていくことにしよう。

図6 子どもへのかかわり



## ●子どもはうまく育っているか、 そして将来は)))

図7は、自分の子どもについての母親の評価を尋ねたものである。概して子どもの評価

は高く、「とても・わりとそう」を合わせた数値では、「気持ちがやさしい」(83%)、

図7 子どものタイプ

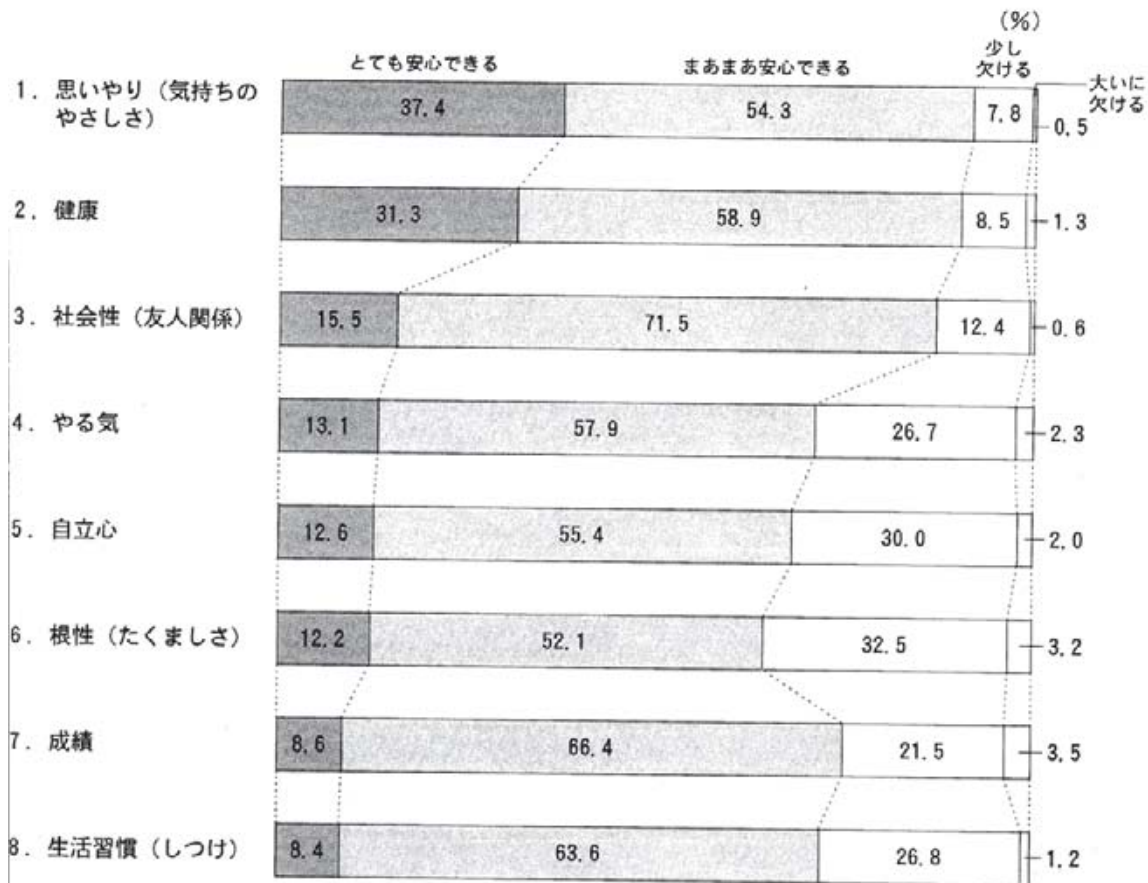


「社交性がある」(55%)、「やる気がある」(52%)、「がまん強い」(46%)、「たくましい」(37%)と並ぶ。

したがって次の図8にあるように、子どもの現在については、どの側面も「まあまあ安心できる」と評価している。大きくは欠けていないものの「少し欠ける」とするものが2

割から3割になっている項目をみると、表の下から「生活習慣(しつけ)」「成績」「根性(たくましさ)」「自立心」「やる気」ということになる。

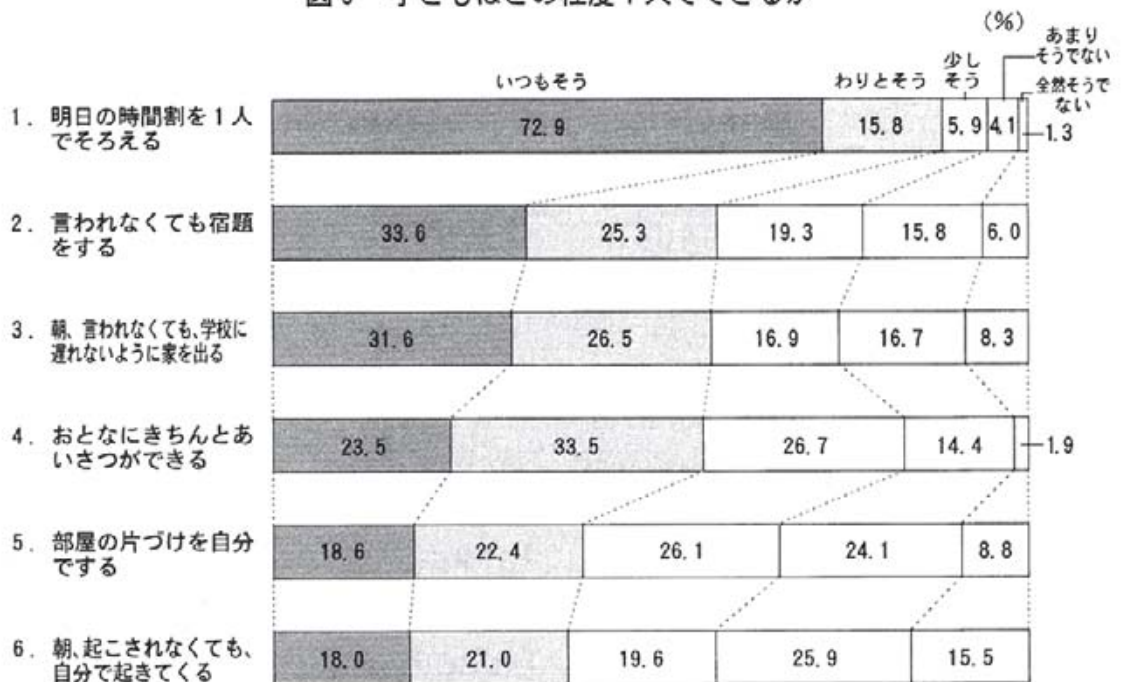
図8 子どもの育ち方



次いで子どもがどの程度1人でできるか示したものが、図9である。これについても、「朝、起こされなくても、自分で起きてくる」「部屋の片づけ」に問題があるくらいで、全体としては「いつも・わりと」1人でできると、肯定的に子どもをとらえている。

では、子どもの将来については、どう考えているかをみていきたい。表7に示したように、子どもへの教育期待は非常に高く、男子については86%が大学または大学院まで（子どもが望んだら）行かせてやりたいと考えている。女子についても短大を含めると79%の

図9 子どもはどの程度1人でできるか



ものが高い学歴を期待している。

次に自分が年をとったときに、子どもとの関係をどうしたいかをみたのが表8である。これで見ると、母親たちは子どもから自立した老後を設計しようとしており、子どもとの同居を望むものは、2世帯住宅居住を含め

ても、十数%にすぎない。「近所に住んでほしい」が女子34%、男子で24%であり、「住む場所にこだわらない」とするものも男子5割、女子3割という数値である。

表7 子どもの進学

(%)

	高 校	専門学校	短 大	ふつうの大学	むずかしい大学	大学院
男子 (1,309人)	7.3	6.6	—	55.2	11.8	19.1
女子 (1,257人)	8.7	12.5	19.4	39.0	7.4	13.0

( )内はサンプル数(以下同)

表8 子どもとの老後の距離

(%)

	完全な同居	2世帯住宅	近所に	数時間範囲	外国でも可	こだわらず
男 子	3.1	12.1	24.1	11.6	2.3	46.8
女 子	2.3	10.1	33.5	19.5	1.5	33.1

## ●母親のタイプ)))

子どもの数が子育てにどう影響するかをみていくために、まず前段階として、母親のライフスタイルを概観しておこう。

図10は、自分自身について、どんなタイプの母親かの自己評価である。ほとんどの日常的な行動については、おおむね自分を肯定的に評価している。しかしここで、「あまりそうでない」と「全然そうでない」を合わせた数値で、比較的高いものから判断すると、半数以上が自分を、「おけいごとやスポーツをしていない」「家計のやりくりが下手」であるとしている。

ここで、16の質問項目に対して、因子分析

を用いて現在の母親のタイプを規定する要因(因子)を析出することを試みた。

直交バリマックス回転により抽出した5因子を説明力の強い順で、仮に「家内型」「つき合い型」「習い事型」「教養型」「家外型(外出型)」と名づけた。

---

\*統計学における因子分析の技法の1つ。心理的特性について測定された測定値の間にみられる構造を、できるだけ単純化し共通の説明変数を見つけて心理学的解釈を容易にする目的で行う。抽出した因子を、バリマックス基準(因子負荷量の2乗値の変数別分散の総和)を最大化するように直交に回転させる。



図10 どんなタイプの母親か（自分自身について）



表9には、質問項目と因子負荷量を示した。

「家内型」は、いわゆる家事もきちんとこなし、夫の世話もひと通りして、家事をきちんとこなす、まじめで「昔ながらの良妻賢母的なお母さん」ということになるのだろうか。

「つき合い型」の母親は、人との関係を大事にしており、友人が多く、親戚ともよくつき合っている。家には人の出入りが多い。料理好きな側面を考えると世話好きだけでなく、家の仕事も結構している人情型の母親かもしれない。

「習い事型」は、おけいごとやスポーツ

にいそしむ、時間的にも経済的にも、ややゆとりある層の母親の姿であろう。

そして「教養型」の母親は、新聞や本からは時代の動きを知るなど、知的好奇心が旺盛なタイプらしい。ひょっとすると、時間的経済的ゆとりはないが、子ども好きで向上心を持って、生き生き暮らすタイプだろう。

最後は「家外型（外出型）」である。家の中より外に関心が向き、とにかく何とか時間的にも経済的にもやりくりをつけ、おしゃれして外出することで、生き生きする母親のようである。

表9 母親のタイプの類型

		家内型	つき合い型	習い事型	教養型	家外型
家内型	1. 家事をきちんとするのが好き	.86871	.10272	.06774	.01481	.04218
	2. 掃除が好き	.85451	.09588	.02254	.01072	.06516
	3. 洗濯が好き	.54902	.06609	.14037	.46727	.29497
	4. 夫の世話をまめにする	.49037	.29117	.02352	.36300	.07075
	5. 仕事（家業なども含めて）をするのが好き	.46453	.20915	.16888	.25734	.01433
つき合い型	6. お客を招いたり、友人を呼ぶのが好き	.14191	.77594	.10739	.03636	.21503
	7. 友だちが多い	.03671	.74094	.21155	.10901	.15473
	8. 親戚つき合いをまめにしている	.17614	.69820	.05929	.06583	.00136
	9. 料理が好き	.39039	.46791	.06560	.22827	.20789
習い事型	10. おけいこごとをしている	.04457	.00723	.82288	.02078	.03369
	11. スポーツをしている	.02509	.17656	.74373	.11123	.07153
教養型	12. 新聞や本をよく読む	.01489	.01328	.14156	.82828	.05062
	13. (他人の子どもも含めて) 子ども一般が好き	.19515	.39771	.03830	.49527	.02970
家外型	14. 外出が好き	.06741	.34589	.18636	.12786	.71464
	15. 家計のやりくりが上手	.28914	.35660	.21238	.08764	.48955
	16. おしゃれ	.44863	.23357	.27399	.00362	.48285



### ●人生で得たもの・失ったもの)))

少子化傾向がなぜ続くのか。それを考察するために、背景となっている諸条件をいくつか検討したい。

図11は子育てに対する夫の協力ぶりだが、「とても・わりとそう」の割合をみていくと「夜の帰りが遅い」「仕事をするのが好き」が4割以上を占め、相変わらずの仕事人間である。「自分の身の回りのことは自分でする」「子どもと遊ぶのが好き」なども上位に並び、多少なりとも夫の像はかつてより、家事や育児に協力的になってきている気配もみえるが、母親の育児負担を大きく軽減するものではなさそうである。

では母親は、子どもができたために、人生で何を得たのか。逆に何を失ったか。また人生にとっての子どもの意味は今どうなってい

るのか。図12をみてみる。

図12の上部に掲げたように、母親は子どもの存在によって、多くのものを得ている。「たくましくなり、毎日が楽しくなり、友人が増え、生きがいができ、家族がまとまって、忍耐強くなり、人間としての幅ができた」と5割以上が答えている。

しかし、子どもを持ったために人生で「失ったもの」も、ないわけではない。表の下部をみると、「経済的ゆとりを失った、ストレスが増えた、身なりにかまわなくなった、遊びや楽しみの時間がなくなった、ていねいに家事ができなくなった、仕事をやめなければならなくなった」と、2割を超える母親が答えている。

図11 子育てに関する夫の協力

	(%)				
	とてもそう	わりとそう	少しそう	あまり そうでない	全然 そうでない
1. 夜の帰りが遅い	21.0	21.8	21.3	19.7	16.2
2. 自分の身の回りのことは自分でする	20.6	33.8	18.4	17.5	9.7
3. 子どもと遊ぶのが好き	20.3	30.0	27.1	17.6	5.0
4. 友だちが多い	17.3	34.7	24.1	18.9	5.0
5. 忙しく会社などの仕事をするのが好き	15.8	26.0	30.5	22.0	5.7
6. 家庭第一主義	14.8	27.2	21.4	24.9	11.7
7. (他人の子どもも含めて) 子ども一般が好き	13.3	32.6	26.1	22.5	5.5
8. 女性の社会参加に理解がある	11.3	31.0	31.6	18.9	7.2
9. 子どもの世話をするのが好き	10.8	24.5	27.7	27.5	9.5
10. まめに家事を手伝ってくれる	10.1	21.5	24.2	23.8	20.4

図12 子どもができたために、人生で得たもの・失ったもの

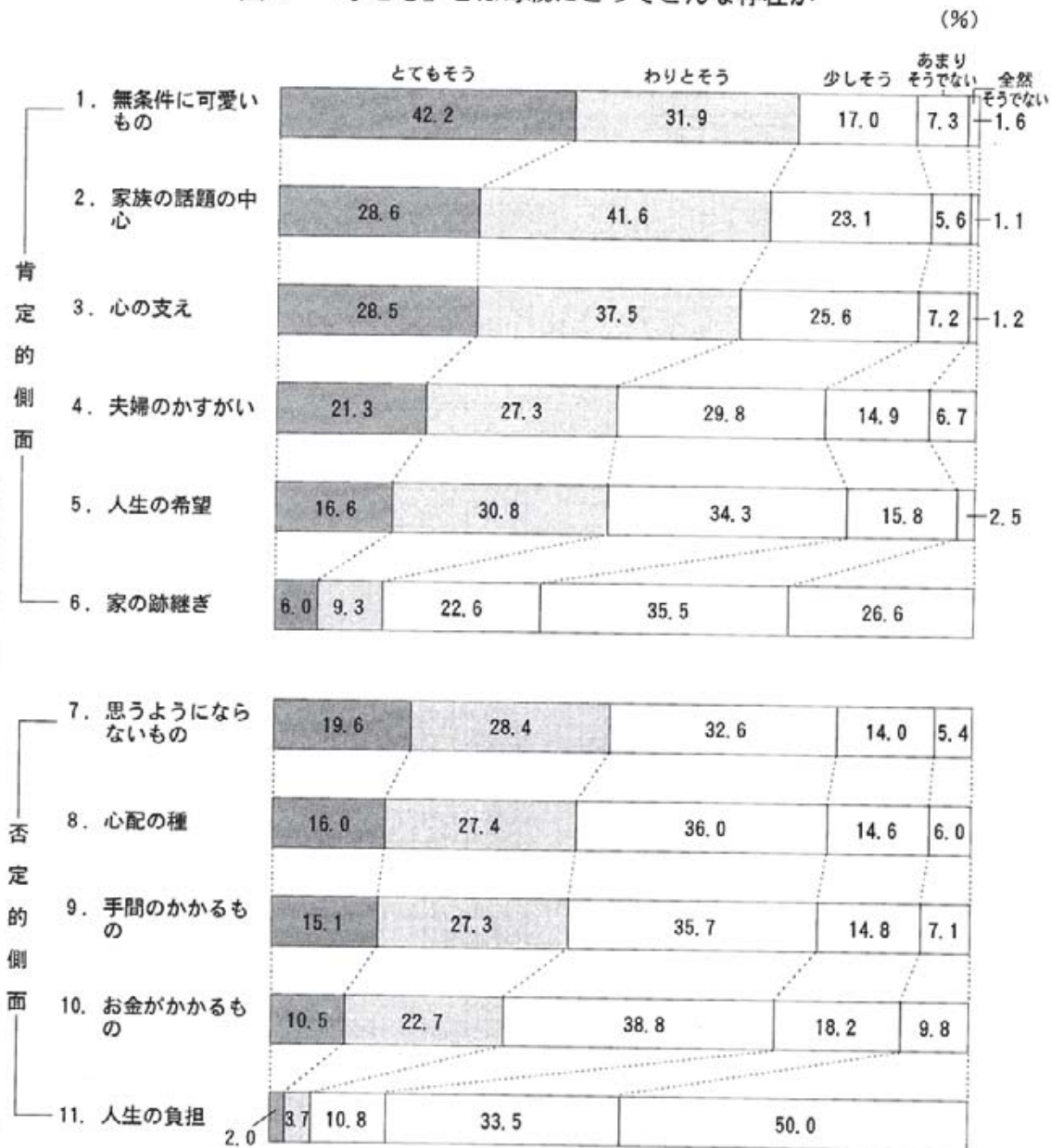


## ●子どもに対する感情)))

それに続いて、子どもについての感情をみると、図13の下部にあるように、「思うようにならないもの」「心配の種」「手間のかかるもの」「お金がかかるもの」などの項目

について、多少なりとも肯定するものが8割近くに達している。しかし、だからといって、子どもを「人生の負担」とするものは、「とても・わりとそう」を合わせて6%、「少し

図13 「子ども」とは母親にとってどんな存在か



そう」を合わせても17%でしかない。

そして否定的感情を大きく上回る割合で、図の上部にあるように「無条件に可愛いもの」「家族の話題の中心」「心の支え」を肯定する母親は9割を超えていて、しかも肯定の度合いが強いことに注目しておきたい。

少し角度を変えて、図14で現在の母親の精神的身体的な調子をもてみる。「体力の低

下」は8割が多少とも自覚しており、「よく肩がこる、いらいらして怒りっぽい、小さいことが気になる、よく落ち込む」などの症状もみられるが、8割の母親が「よく眠れ、食欲もあり」、7割が「元気はつらつ」と答えている。そして図15でみるように、今の暮らしの中で、おおむね幸福感を持って生活している。

図14 母親の体調

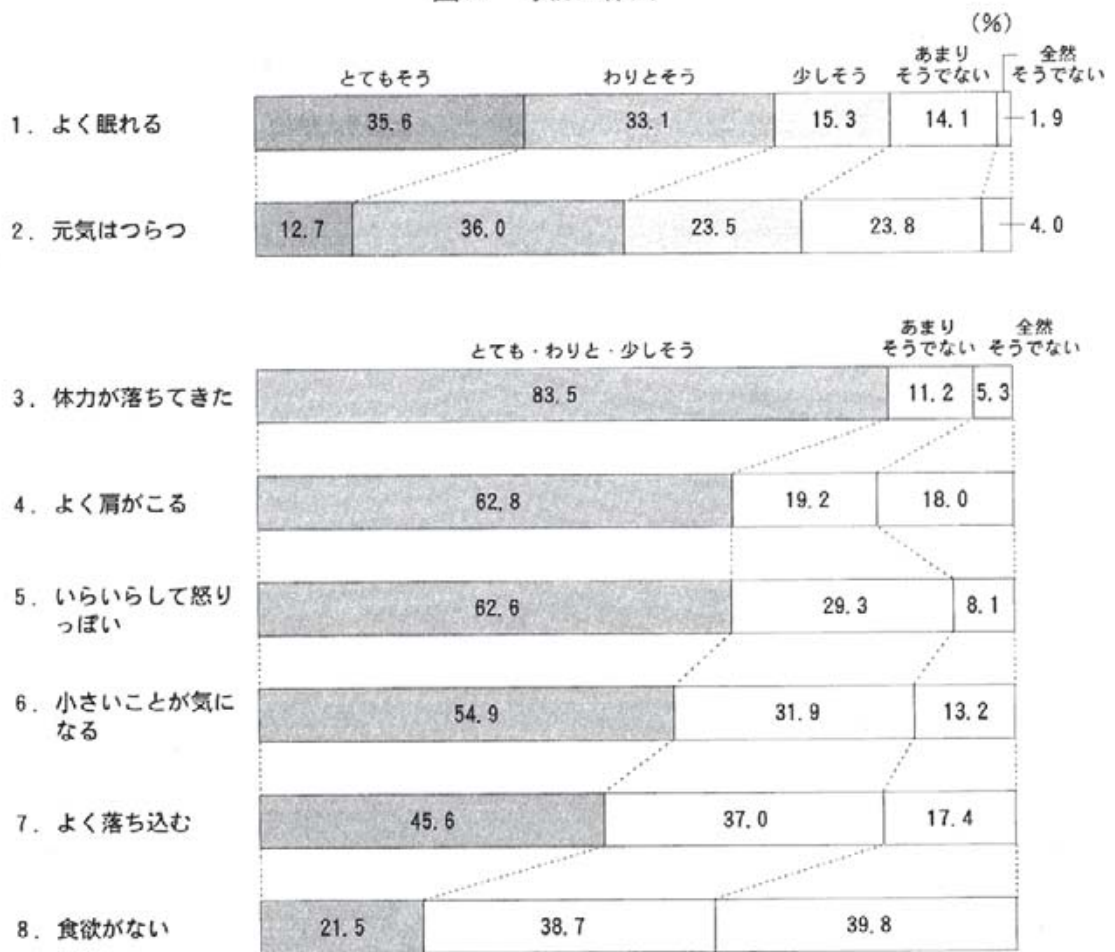
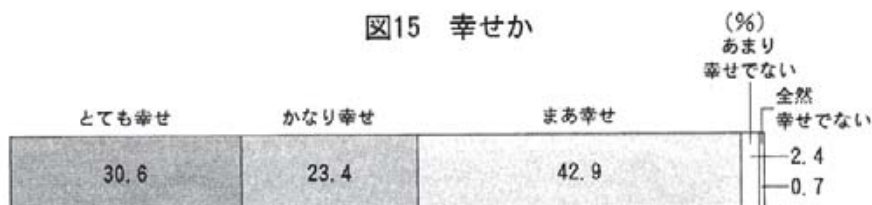


図15 幸せか





## ●少子化の背景)))

これまでみてきたように、母親はわが子に対してかなりの満足感を持ち、現在の子育てにもそれなりに意味を感じ、おおむね幸せに生き生きと暮らしている。また一人っ子の母親も、選択的に子どもを1人に限ったわけではない。にもかかわらず、なぜ出生率は依然低下しつづけ、少子化が進むのだろうか。

まず、もっと子どもがほしいと考える年齢を尋ねた結果が、表10である。これによると「ぜひ産みたい」あるいは「場合によって」

は産んでもいいと思っているものは、現在30歳以下の母親に22%いるが、それでももう予定のないものが78%にも達している。

一人っ子の母親を年齢別に分けて、一人っ子にした理由を聞いた結果が表11である。41歳以上では恵まれなかったこと、30代後半では仕事のため、30代前半では経済的理由と子どもが好きでないことを理由にする人が、いくぶん多い。

表10 現在の年齢 × もっと子どもがほしいか

(%)

	ぜひ産みたい	場合によって	予定なし
30歳以下 (94人)	6.5	15.1	78.4
31～35歳 (519人)	3.5	10.9	85.6
36～40歳 (732人)	1.6	6.2	92.2
41歳以上 (414人)	2.0	2.4	95.6

( ) 内はサンプル数 (以下同)

表11 現在の年齢 × なぜ「1人」なのか

(%)

	恵まれたい	仕事のため	経済的に	好きでない	その他
30歳以下 (16人)	37.5	0.0	6.3	0.0	56.2
31～35歳 (64人)	46.9	1.6	14.1	9.4	28.0
36～40歳 (67人)	53.7	3.0	11.9	6.0	25.4
41歳以上 (48人)	56.2	2.1	4.2	6.2	31.3

表12にあるように、第1子出産年齢が早いものほど子どもを多く産む傾向がみられ、また23～24歳で第1子を出産しているものが、多子家庭を形成しているようである。そして一人っ子の母親の第1子出産年齢は、29歳以上と、年齢が高くなっている。

女性の高学歴化が、非婚化や晩婚化を促す

要因の1つになっているとされる。この点を見るために、学歴との関連で第1子出産年齢をみたのが、表13である。表が示すように、学歴が高くなるほど、第1子出産年齢も高くなっており、高卒の母親では、27歳以上で第1子を出産したものは38%だが、大卒では57%と、半数以上が27歳以上で第1子を出産し

表12 第1子出産年齢 × 子どもの数

(%)

		全 体	1 人	2 人	3人以上
22歳以下	(249人)	13.9	14.0	49.3	36.7
23～24歳	(352人)	20.1	7.3	48.6	44.1
25～26歳	(426人)	23.9	7.1	55.9	37.0
27～28歳	(361人)	20.4	10.7	60.4	28.9
29歳以上	(393人)	21.7	19.0	60.1	20.9

表13 学歴 × 第1子出産年齢

(%)

		22歳以下	23～24歳	25～26歳	27～28歳	29歳以上
高 卒	(884人)	16.8	22.5	22.5	17.4	20.8
短大・専門学校卒	(468人)	5.8	20.7	26.7	22.4	24.4
大卒	(265人)	6.9	10.3	25.9	29.8	27.1

ている。

学歴、年齢以外に、職業の要因をみてみると、表14、表15にあるように、フルタイムで働く人々は専業主婦や他の職業の人より一人っ子が多くなっている。また専業主婦の場合には、多少子どもが多くても、時間的にも子育てのゆとりがありそうに思えるが、「恵

まれない」ものが59%と多くなっており、14%は「子どもが好きでない」と答えている。こうして、ゆとりがあっても子どもが好きでないので、子どもを産まないという人々は、今後もっと増えてくるかもしれない。

表14 職業 × 子どもの数

(%)

	全体	1人	2人	3人以上
専業主婦 (845人)	47.2	10.5	53.4	36.1
パートタイム (515人)	28.4	12.9	56.5	30.6
フルタイム (189人)	10.7	16.0	58.3	25.7
自営業 (170人)	9.7	6.8	54.6	38.6
その他 (71人)	4.0	15.1	53.6	31.3

表15 職業 × なぜ「1人」なのか

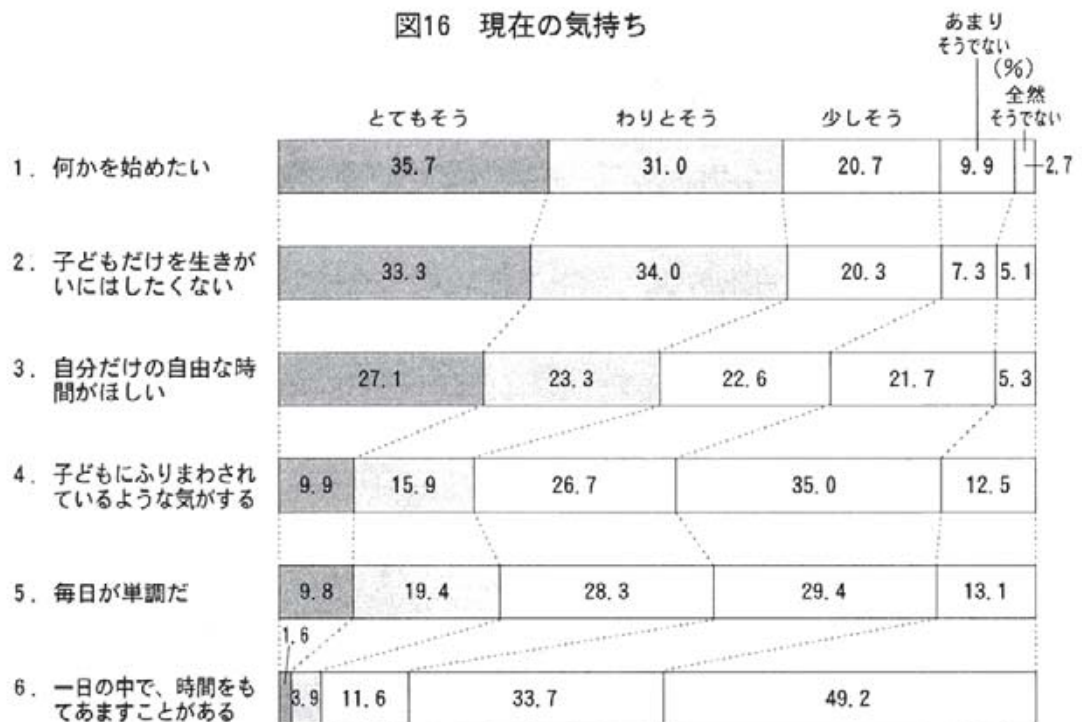
(%)

	恵まれない	仕事のため	経済的に	好きでない	その他
専業主婦 (92人)	59.3	1.1	4.4	14.3	20.9
パートタイム (61人)	54.1	0.0	16.4	0.0	29.5
フルタイム (30人)	30.0	3.3	16.7	3.3	46.7
自営業 (10人)	70.0	10.0	0.0	0.0	20.0

最後に図16で現在の心境を尋ねてみると、「子育てに手がかからなくなったら、何かを始めたい」「子どもだけを生きがいはしたくない」という感情は、「とても・わりと・少しそう」を合わせた数値が9割近くに達している。母親たちは、子どもを育てた意味を肯定しながらも、それだけでは、自分が自己実現を果たしたとは思えない時代がきている

のであろう。高学歴化や晩婚化以上に、こうした人生の問い方が、少子化に奥深く潜行していると考えられる。自分が本当に生きたと実感できる人生は何か。子育ては自分にとって大きな喜びと楽しみではあっても、それは人生の意味のパーツにすぎず、それ以上の自分らしい生き方を模索していく課題を、多くの母親が背負っているのであろう。

図16 現在の気持ち





子育ての実際は似たようであり、家庭によってかなり違っている。親も子どもも一人一人違うもの同士が組み合わされ、相互にかかわり合う過程のためであろう。しかし家族の形によって、共通点も生まれる。子どもの数も、その1つかもかもしれない。子どもが1人か2人か、あるいは3人以上かによって、それぞれ物理的・心理的に似た環境が生み出される。

今回の調査では、子どもが1人、2人の母親の子育てと、多子の母親の子育てとを比較することで、少子化が進む時代の子育ての行方を探してみたい。

### ●子どもの人数と幼児期の子育て)))

子どもの人数によって、幼児期(4~5歳)の母親の子育てに、違いはみられるだろうか。

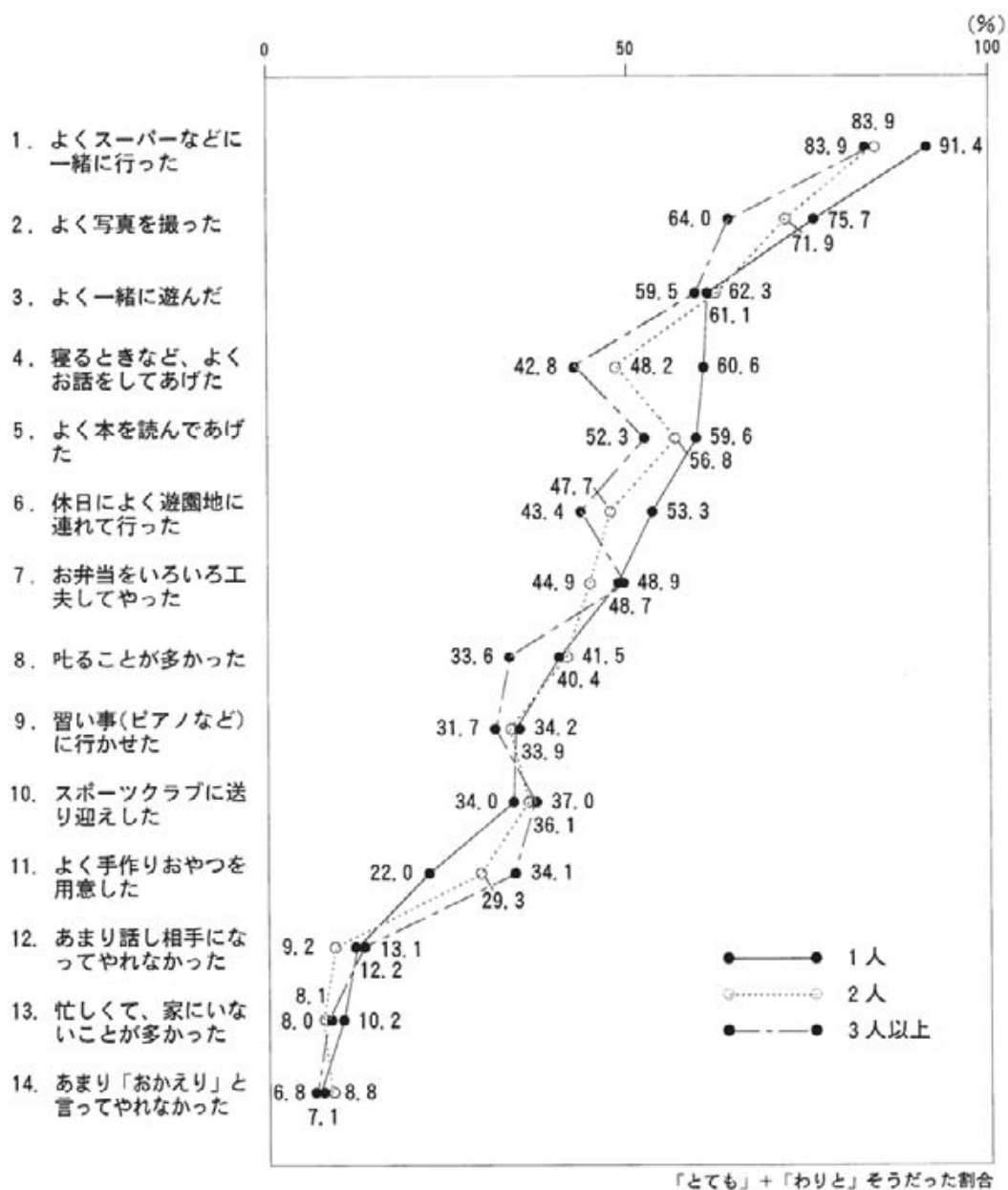
図17は、「よくスーパーなどと一緒にいった」から「あまり『おかえり』と言ってやれなかった」までの項目に、「とても・わりとそうだった」と答えたものの割合を子どもの人数別にみたものである。図をみると、一人っ子の場合と子どもが3人以上の場合には、

大きな違いがみられる。

一人っ子の場合には、3人以上よりもよく写真を撮り、寝るときなど、よくお話をしたり、よく本を読んでやっている。

ただし「よく手作りおやつを用意した」は、3人以上の場合が多くなっている。それ以外は、子どもの人数が少ないほど、母親たちは子どもに細かい対応をしている。

図17 子どもが4、5歳の頃の育て方 × 子どもの数



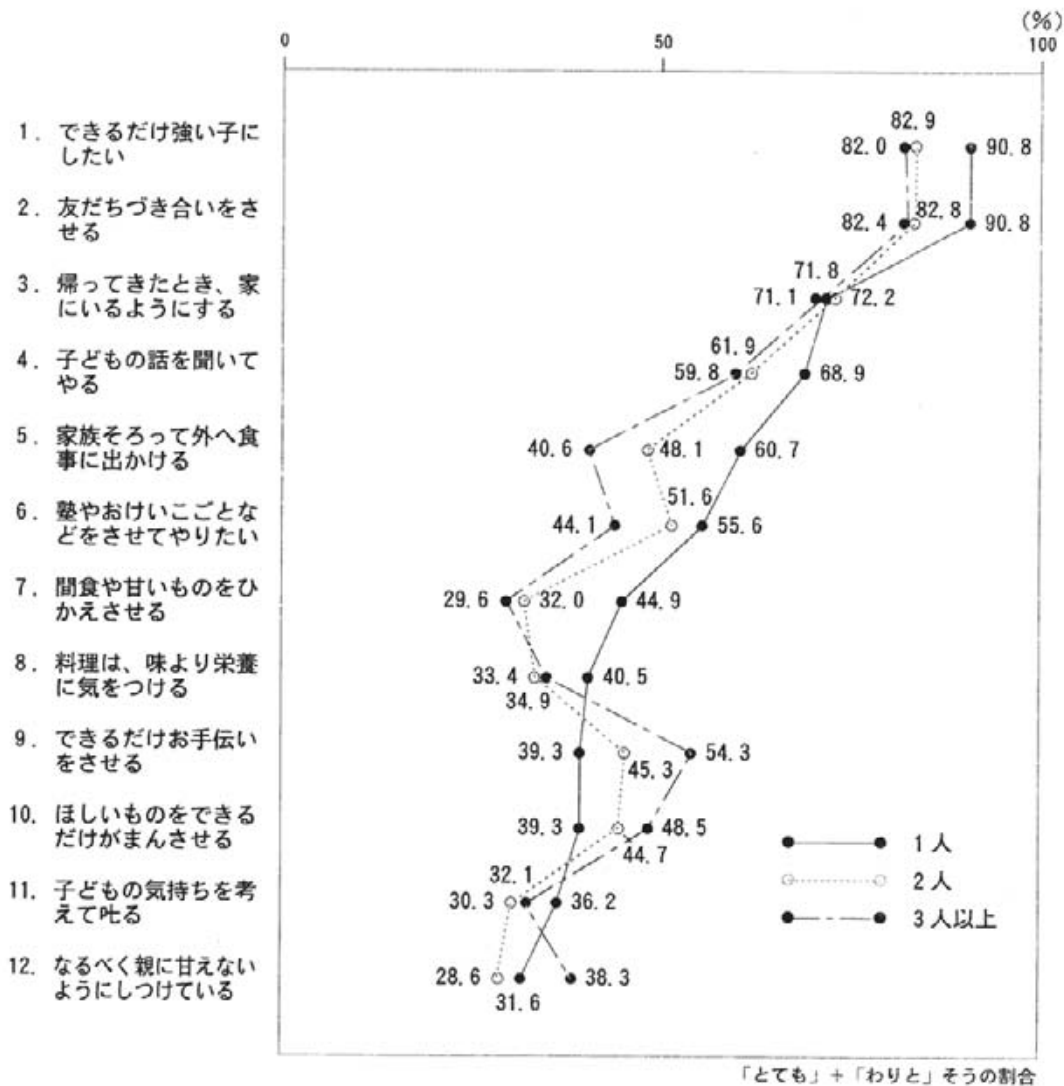
## ● 現在の子育て)))

次に、子どもが小学生になった時点での子育てに、子ども数による差があるかみてみよう。図18は、「できるだけ強い子にしたい」から「なるべく親に甘えないようにしつけている」まで、現在の子育てでしている配慮を尋ねたものである。結果をみると、一人っ子の母親は、「子どもの話を聞いてやったり、家族そろって食事に出かけたり、間食や甘いものをひかえさせる」など、やはり対応はき

め細かい。

しかし他方で、子どもが3人以上いる母親は、「できるだけ手伝いをさせたり、ほしいものをがまんさせる」など、かつての多子時代の家庭の様子を思い起こさせるような子育てをしている。今後、少子化が進むにつれて、昔の家庭を思い起こさせるような子育ては、ますます少なくなっていくに違いない。

図18 現在の子育ての配慮 × 子どもの数



## ●子どもへのかかわり)))

わが子について、どのくらいよく知っているかをみる項目から、子どもとの関係をみた

のが表16である。子どもの「好きなテレビ番組」も、「よく読んでいる本や雑誌の名称」

表16 子どもへのかかわり × 子どもの数

(%)

	1 人	2 人	3人以上
1. 好きなテレビ番組	62.9	> 54.1	> 50.2
2. 仲良しの友だちの名称	48.2	> 40.5	41.9
3. よく読んでいる本や雑誌の名称	54.6	> 46.2	> 42.8
4. 得意な教科	43.7	> 42.6	> 38.1
5. 最近友だちと外で何をして遊んでいるか	31.0	26.9	29.5
6. 好きなタレントやスポーツ選手の名称	27.6	> 23.1	> 21.6
7. 子どもの心の中	6.2	7.6	8.2

「よく知っている」割合



についても、一人っ子の母親の方がよく知っている。

また表17は、場面を設定して、子どもに対する心配の強さを子どもの人数別に比較したものである。一人っ子の母親は「学校からの帰りがいつもより1時間遅れたとき」に「とても心配する」が56%、「友だちにいじめら

れて泣いて帰ってきたとき」が51%、「微熱(37.0℃)が出たとき」21%など、ほとんどの場面で多子の母親よりも、より心配している。子どもの人数が少ない家庭では、母と子のかかわりが近くなることが示されている。

表17 子どもに対する心配 × 子どもの数

(%)

	1人		2人		3人以上
1. 学校からの帰りがいつもより1時間遅れたとき	(55.8)	>	43.0	>	42.0
2. 友だちにいじめられて泣いて帰ってきたとき	(50.8)	>	42.6	>	40.8
3. 成績が急に下がったとき	24.9		23.2		26.2
4. 微熱(37.0℃)が出たとき	(20.7)	>	10.1	>	9.3
5. 先生に叱られて帰ってきたとき	16.8	<	18.6	<	(21.9)
6. 夕食を半分くらい残したとき	(12.2)	>	9.1	>	5.7

「とても心配」の割合

## ●子どものタイプ)))

では子どもの性格についての母親たちの認識は、子ども数によってどう変わるか。

表18をみると、一人っ子の母親は多子の母親よりもわが子を「甘えん坊」であり、「のんびり」しており、「わがまま」だと思っている。他方、多子の母親は、わが子を「がま

ん強く」「たくましい」とみている。一般に一人っ子の性格の特徴と、多子の子どもの性格の特徴とされているものがよく表れているが、概して子どもの人数が多い方が、母親はわが子をよく評価していることがみられる。

表18 子どものタイプ × 子どもの数

(%)

	1 人	2 人	3人以上
1. 気持ちやさしい	84.0	80.9	83.3
2. 甘えん坊	56.6 >	47.1 >	42.1
3. 社交性がある	54.9	54.5 <	58.5
4. やる気がある	50.5	49.9	53.5
5. のんびりしている (仕事が遅い)	48.0 >	38.4 >	37.0
6. がまん強い	44.9	43.6 <	50.6
7. わがまま	36.4 >	29.7 >	23.4
8. 依頼心が強い	35.4 >	27.9	27.2
9. たくましい	32.7 <	38.5 <	39.1
10. 言いたいことがなかなか言えない	29.1	28.2	31.1
11. 人見知りをする	23.0	24.8	26.2

「とても」+「わりと」その割合

## ●子どもの自立)))

一人っ子の母親の細やかな子育てと親子関係をみてきたが、では自立性に関してはどうか。

表19は、生活習慣の自立に関する項目である。「明日の時間割を1人でそろえる」から、「朝、起こされなくても、自分で起きてくる」までの全ての項目で、一人っ子よりも多

子家庭の子どもの方が、「とても・わりとそう」であるとするものの数値が高くなっている。子どもの人数が3人以上になると、子どもは多くの面で自立的にならざるを得ないのであろう。それに比べて、一人っ子の自立はやや遅れがちである。

表19 子どもの自立 × 子どもの数

(%)

	1人	2人	3人以上
1. 明日の時間割を1人でそろえる	80.1	< 88.9	< (90.5)
2. 言われなくても宿題をする	53.8	< 59.7	< (60.1)
3. 朝、言われなくても、学校に遅れないように家を出る	53.3	< 55.9	< (61.9)
4. おとなにきちんとあいさつができる	43.4	< 55.3	< (63.7)
5. 部屋の片づけを自分でする	35.5	< 38.3	< (46.2)
6. 朝、起こされなくても、自分で起きてくる	34.2	< 38.5	< (43.4)

「いつも」+「わりと」その割合

表20は、自立も含めた子どもの成長に対する母親の安心度、満足度をみたものである。全体としては子どもを、「思いやり」があり、「健康」で、「友人関係」も良好であるとしている。

しかしここでも、多子の母親の方が子ども

の成長について安心感を持っており、「やる気」があり、「自立心」「たくましさ」があると評価している。子どもは、親に手をかけてもらえない分、自然に自立を果たすのであろう。

表20 子どもの育ち方 × 子どもの数

(%)

	1 人	2 人	3人以上
1. 思いやり（気持ちのやさしさ）	91.4	91.8	90.7
2. 健康	84.9	91.1	88.2
3. 社会性（友人関係）	84.8	86.4	86.3
4. 成績	73.2	75.8	73.9
5. 生活習慣（しつけ）	71.4	69.8	< 75.4
6. やる気	66.0	< 70.8	< 71.5
7. 自立心	63.0	< 66.4	< 71.5
8. 根性（たくましさ）	55.8	< 64.8	< 66.7

「とても」＋「まあまあ」安心できる割合



### ●子どもの存在)))

おそらく一人っ子の母親は、多子の母親よりも、時間的、心理的にゆとりがある。とすれば一人っ子の母親には、多子の母親とは違ったライフスタイルが生まれるかもしれない。

表21は、子どもとは母親にとってどんな存在かを、子ども数でみたものだ。

まず肯定的側面の項目を子どもの人数別にみると、多子の母親に、子どもを「夫婦のかすがい」とみるものが多く、一人っ子の母親の場合は、子どもは「家の跡継ぎ」とするものが若干多くなっている。しかし、母親たちにとって子どもは、人数の多少にかかわらず「無条件に可愛いもの」であり、「心の支え」「家族の話題の中心」となっている。

しかし否定的側面の項目をみると、多子の母親に数値が高いのが目につく。子どもは、

「思うようにならず」、「手間」や「お金がかかるもの」であるとしている。多子の母親たちの子育ての苦労が伝わってくるが、しかし子どもの存在を「人生の負担」とは思っていないようである。

では、子どもの存在について、否定的に感じる態度には、母親の職業による違いはあるのか。図19、図20は、「子どもは思うようにならないもの」「子どもは手間のかかるもの」の2項目について、「とても・わりとそう」と答えたものを、子どもが1人の場合と3人以上の場合とに分けて、職業別にグラフ化したものである。

フルタイム、パートタイム、自営業等の有職の母親たちは、子どもの人数が多くなると子どもの成長が思うようにならず、手間がか

かると訴えている。母親が職業を持ってはいなくても、子どもが一人っ子であればさほど大変ではないが、仕事を持って子どもを3人以上育てるのは、やはり大変なのであろう。

ところが専業主婦をみると、子どもが1人でも3人以上でも大変さを感じる割合には大した差がない。余裕があるために、子どもの

人数が増えても、対応できるのかもしれない。しかし、子育てを大変だと思うこと自体は、有職の母親よりも数値は決して低くない。むしろ高いくらいである。専業主婦の母親は、他に大変と感じるものがないために、相対的に有職の母親より、子育ての大変さを感じてしまうのだろう。

表21 子どもの存在 × 子どもの数

(%)

		1 人	2 人	3人以上
肯定的側面	1. 無条件に可愛いもの	72.9	77.1	70.1
	2. 心の支え	68.9	61.5	68.1
	3. 家族の話題の中心	67.8	< 70.9	< 72.2
	4. 人生の希望	47.2	43.0	50.5
	5. 夫婦のかすがい	43.8	< 48.6	< 51.0
	6. 家の跡継ぎ	18.6	15.8	15.3
否定的側面	7. 思うようにならないもの	37.7	< 49.5	< 51.1
	8. 心配の種	33.7	< 44.2	< 46.7
	9. 手間のかかるもの	24.6	< 43.0	< 48.9
	10. お金がかかるもの	22.6	< 30.0	< 42.1
	11. 人生の負担	8.1	5.3	6.9

「とても」+「わりと」その割合

図19 子どもは思うようにならないもの × 職業・子どもの数

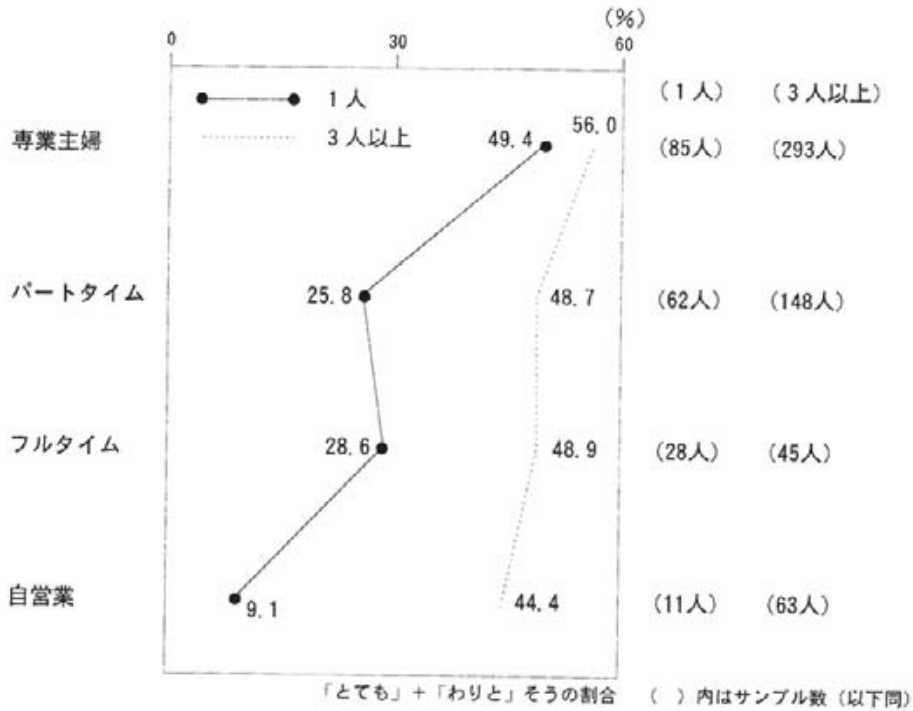
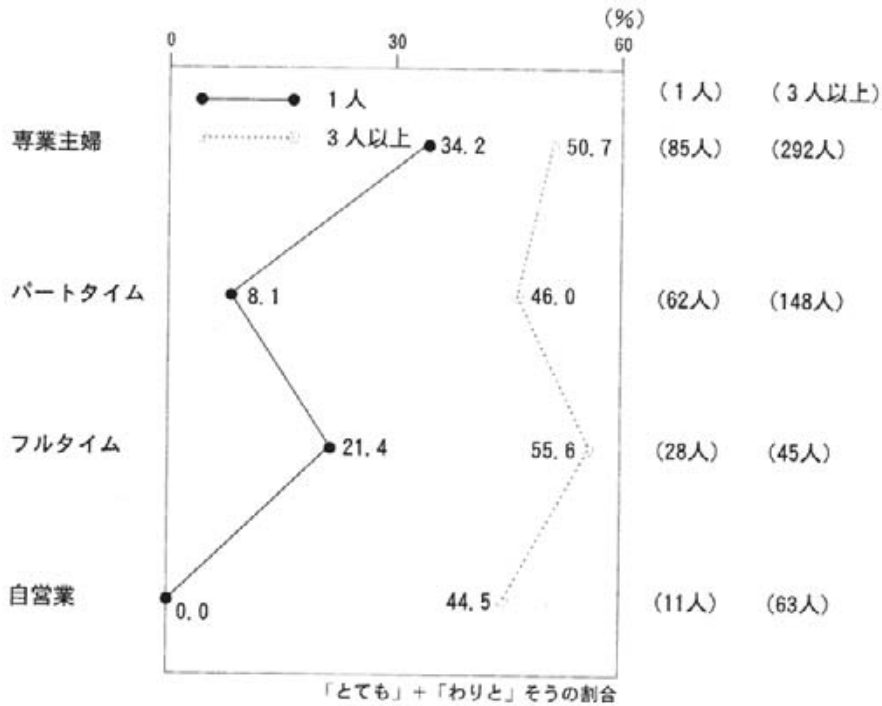


図20 子どもは手間のかかるもの × 職業・子どもの数



## ●子ども数と人生で 得たもの・失ったもの)))

子どもを持つことで、人生で得たものは大きいと考えられるが、失ったものもあることは、すでにみてきた。表22は、この点を子ども的人数別でみた数値である。

ほとんどの項目で、子ども的人数が多い方が肯定的な数値が高く、逆に一人っ子の母親

の数値は低くなっている。すなわち、3人以上の子どもを持つと、得たものも多いが、失ったものも多いという傾向がみられる。逆に一人っ子では、得たものも少ない代わりに、失ったものも少ない。



表22 子どもができたために、人生で得たもの・失ったもの × 子どもの数  
(%)

		1 人	2 人	3人以上
得 た も の	1. 毎日が楽しくなった	66.7	< 72.7	< (74.0)
	2. たくましくなった	55.1	< 77.6	< (77.8)
	3. 地域に友だちが増えた	51.3	< 65.5	< (69.9)
	4. 生きがいがあった	49.3	< 54.4	< (57.7)
	5. 家族がまとまった	45.7	(63.7)	61.7
	6. 他人にもやさしくなった	41.1	< 44.8	< (50.0)
	7. 人間としての幅があった	40.9	< 50.6	< (62.1)
	8. 忍耐強くなった	40.4	< 53.4	< (56.9)
	9. 将来が明るくなった	34.4	< 38.2	< (48.8)
	10. 謙虚になった	27.4	22.9	(30.9)
失 っ た も の	11. ストレスが増えた	27.1	< 34.2	< (35.3)
	12. 経済的ゆとりがなくなった	19.7	< 31.2	< (41.0)
	13. 身なりにかまわなくなった	17.0	(27.3)	26.5
	14. ていねいに家事ができなくなった	15.3	< 21.0	< (29.4)
	15. 仕事をやめなければならなくなった	15.2	< 21.2	< (24.4)
	16. 遊びや楽しみの時間がなくなった	14.4	< 25.0	< (29.7)
	17. ものを考える時間がなくなった	11.8	< 15.4	< (21.7)
	18. 精神的にゆとりがなくなった	9.1	< 12.1	< (17.6)
	19. 人間としての成長が止まった	7.1	2.6	3.7

「全く」+「わりと」その通りの割合

表23、表24は、「地域に友だちが増えた」「忍耐強くなった」の2項目を取り上げて、子どもの人数別にみたものだが、前記の傾向

を示している（なおこの表で、4人以上はサンプル数が少ないので、一応カッコでくくってある）。

表23 地域に友だちが増えた × 子どもの数

(%)

	全くその通り	わりとその通り	少しその通り	あまりそうでない	全然そうでない
1人	19.5	31.7	27.2	18.0	3.6
2人	26.5	39.0	22.8	9.0	2.7
3人	29.9	39.3	22.3	6.4	2.1
(4人以上)	31.7	41.4	19.0	7.9	0.0

表24 忍耐強くなった × 子どもの数

(%)

	全くその通り	わりとその通り	少しその通り	あまりそうでない	全然そうでない
1人	10.1	30.3	34.9	20.7	4.0
2人	16.7	36.7	34.2	10.2	2.2
3人	22.3	33.6	30.1	12.1	1.9
(4人以上)	24.6	39.3	21.3	14.8	0.0

## ●母親のタイプと子どもの人数))

子どもの数で、母親の性格やタイプに違いが生まれるのだろうか。表25が示すように、一人っ子の母親は多子の母親に比べて、「洗濯が好き」「掃除が好き」だが、家内型ではなく、「外出が好き」「仕事が好き」で、「おしゃれ」もしている。ここには、家事もこなしながら、おしゃれして外出するのが好きな、家内・家外の両方の要素を並立させた、いわば現代型の母親たちの姿がある。

一方多子の母親は、どちらかというやや

昔風で、「料理が好き」で「夫の世話をまめにする」し、「家計のやりくりも上手」で、「親戚づき合いを大切にする」、かつての日本の母親のイメージ（家内型に近いタイプ）が浮かんでくる。

「家内・家外」並立型の母親像は、少子化がもたらす母親像であり、昔の「家内型」の母親は、かつての多子時代が生み出していた母親像だったのであろう。

表25 母親のタイプ × 子どもの数

(%)

	1 人		2 人		3人以上
1. 洗濯が好き	(73.3)	>	69.6	>	65.4
2. 外出が好き	(64.5)	>	55.1	>	49.6
3. 新聞や本をよく読む	58.2		(60.7)		51.4
4. 仕事(家業なども含めて)をするのが好き	(57.1)	>	49.5		49.6
5. (他人の子どもも含めて)子ども一般が好き	(54.1)		48.5		51.6
6. おしゃれ	(49.5)	>	36.9	>	34.3
7. 友だちが多い	46.9		51.9		51.0
8. 掃除が好き	(44.4)	>	39.0	>	36.5
9. 家事をきちんとするのが好き	43.1		42.2		42.5
10. 料理が好き	41.3	<	42.5	<	(49.0)
11. 夫の世話をまめにする	40.1		38.9		(44.0)
12. お客を招いたり、友人を呼ぶのが好き	39.8		38.8		36.3
13. 親戚つき合いをまめにしている	34.2		33.1		(38.2)
14. 家計のやりくりが上手	22.5		20.0		(25.6)
15. スポーツをしている	18.4	<	21.8	<	(22.5)
16. おけいごとをしている	16.4		17.7		15.2

「とても」+「わりと」その割合

表26で、母親の心身の状態をみると、一人っ子の母親の中に、「よく肩がこる」「小さいことが気になる」「よく落ち込む」と不定愁訴傾向のものがみられる。多子の母親は、

「体力の低下」「いらいらして怒りっぽい」と、子育ての大変さ、体力や時間のゆとりのなさを推測させる項目に数値の上昇がみられる。

表26 母親の体調 × 子どもの数

(%)

	1 人	2 人	3人以上
1. よく眠れる	64.5	69.1	68.8
2. 元気がつらつ	49.8	48.3	47.9
3. よく肩がこる	(46.7) >	39.5	43.1
4. 体力が落ちてきた	43.9 <	44.6 <	(52.3)
5. 小さいことが気になる	(35.9) >	27.7 >	19.8
6. よく落ち込む	(26.8) >	22.1 >	15.3
7. いらいらして怒りっぽい	16.3 <	25.3	(25.4)
8. 食欲がない	8.6	7.3	8.1

「とても」+「わりと」その割合

## ●これからの人生)))

子どもが小学生になって、ある程度親の手が離れると、母親たちはその後の人生をどう設計しようとするか。子どもの人数によって人生設計に何か変化が生じるのだろうか。

表27をみると、多子の母親に「子どもにふ

りまわされている」という思いが強く、「子育てに手がかからなくなったら何かを始めたい」「自分だけの自由な時間がほしい」と思うものが多くなっている。先にみてきた、多子の母親の子育ての大変さのデータと合わせ

表27 現在の気持ち × 子どもの数

(%)

	1 人		2 人		3人以上
1. 子どもだけを生きがいにはしたくない	64.8	<	68.7		68.1
2. 何かを始めたい	59.6	<	65.4	<	71.6
3. 自分だけの自由な時間がほしい	42.5	<	49.4	<	55.5
4. 毎日が単調だ	31.2	>	27.8		28.7
5. 子どもにふりまわされているような気がする	18.6	<	22.2	<	35.4
6. 一日の中で、時間をもてあますことがある	6.0		5.7		4.9

「とても」+「わりと」その割合

てみれば、子育てで失ったものへの挽回欲求であろう。

他方で一人っ子の母親は、「毎日が単調だ」とするものがやや多い程度で、多子の母親に比べれば、何かをしたいという明確な欲求はそれほど強くない。

最後にまとめの意味で、子ども数と母親たちの幸福感の関連をみてみよう。表28による

と、子どもの人数が多くなるほど、23%、31%、34%、32%と、「とても幸せ」な母親が多くなり、「とても・かなり幸せ」を合わせた数値では、42%、55%、58%、68%と、さらに大きい上昇がみられる。

子ども数が多いことは、母親の負担も大きいですが、幸せ感をも増加させる傾向がみられる。中国の「多子多福」という諺が思い出される。

表28 幸せ感 × 子どもの数

(%)

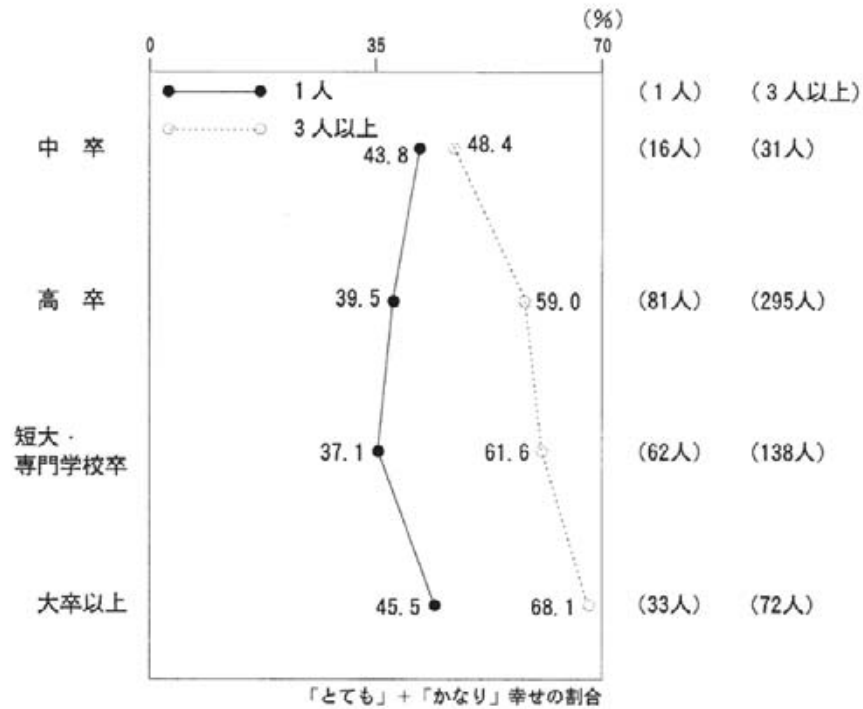
	とても 幸せ	かなり 幸せ	まあ 幸せ	あまり 幸せでない	全然 幸せでない
1人	23.4	18.2	51.1	5.7	1.6
2人	30.5	24.1	43.3	1.6	0.5
3人	34.3	23.4	40.9	1.2	0.2
(4人以上)	31.7	36.6	23.3	6.7	1.7

この幸せ感を、さらに母親の属性別にみたのが、図21と図22である。先にみたように、全体としては子どもの人数が多いと幸せ感も高くなるが、子どもが3人以上の母親には、

学歴が上がると一層幸せ感が増す傾向がみられる。一人っ子の場合には、学歴による違いは僅少である（図21）。

また、図22で職業別にみると、フルタイム

図21 幸せ感 × 学歴・子どもの数



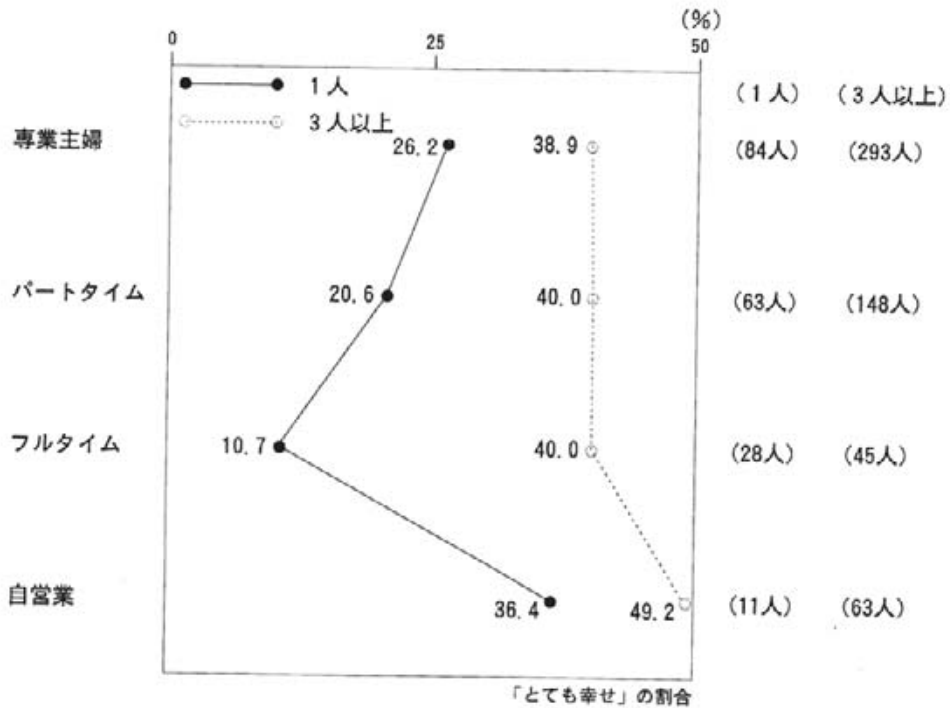


あるいはパートタイムの母親に、子ども数が増えると幸せ感が大きくなるのが目につく。

フルタイムで一人っ子の母親の幸せ感は11%と最も低いが、3人以上の子どもを持つと

40%と大きく上昇する。パートタイマーも21%と40%と、やはり大きく上昇する。自営業の母親は、子どもの数にかかわらず、幸福感はどのグループより高い。

図22 幸せ感 × 職業・子どもの数



## ●まとめ)))

以上多くの角度から、さまざまなデータを見てきたが、多子の母親たちは、あまり細やかに手をかけた子育てはできないものの、子どもへの評価は高く、また母親自身も、子育ては大変だと思う反面、子どもを持った喜びも強く感じている。多子の有職者は一層幸福感が強く、また今後の人生設計への意欲も旺盛である。

それに対して、一人っ子の母親は、細やかな子育てを心がけてはいるものの、予想ほどには手をかけておらず、また多子の母親に比べて、子どもを持ったことで自分の人生が圧迫されているとは思わない代わりに、充実感も幸せ感もそれほどではない。しかし一人っ子の家庭の子育ても、3人以上の子どものいる家庭の子育てと、「一人っ子」という言葉がイメージするほどの違いはなさそうだ。多子といえども、昔のように7人10人の子沢山ではないからであろう。そして母親の中には、

データをとおして、子どもがもたらした幸福の実感が見え隠れするにもかかわらず、「もう1人子どもを」というほどには、子どもに対する思いを持たない様子も、印象的であった。

少子化の進行によって女性は、かつての時代のような「子育てだけの人生」という重荷から解放されたかにみえるが、子どもを1人または2人しか育てない代わりに、人生の充実感を何に感じることができるか、自己実現をどうやって達成するか、それを見いだせないまま、中途半端な状態にいるように思われる。日本での、女性の社会進出は諸外国に比べ多分に遅れており、女性が社会的達成を果たすための条件整備は、あらゆる面で遅れている。子どもを少なくした分、それに倍する人生の充実をどう得ていくか、そのための社会のあり方をどう変えていくかが、少子化社会に生きるわれわれの新しい課題であろう。